



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 17

薬剤師の業務の根本を考える

ファルメディコ株式会社
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
 医師・医学博士 狭間 研至

新しい薬剤師像を考えると 「薬剤師とは何者か」という根本問題が浮上

薬学教育が6年制に移行し、新しい薬剤師像が求められている。みなさん、何度も見たり聞いたりされたことだと思います。しかし、調剤を極めるのか、在宅なのか、漢方なのか、サプリなのか…など、次世代型薬剤師がどういったものかがわかりづらいというケースが少なくありません。

また、薬局でキャリアパスを考えていたり、薬剤師の職能評価をしようとしたときに、一体何を基準にしていけばよいのか、悩まれるケースもあるのではないのでしょうか？

ともすれば、調剤業務はある程度で離れて、採用や教育やクレーム対応など、組織人・企業人としての知識や技能を求めてしまう場合もあります。

実は、この2つは私自身が、自分の薬局を運営したり、薬剤師の生涯教育プログラムに取り組んできたり

したときにいつもぶつかるテーマでした。私は「薬局3.0」や「薬剤師3.0」と提言してきましたが、その中でも、いつも中心にある問題でした。

ただ、最近感じるのは、このことは「薬剤師とは何者？」という根本的な問題に触れているのではないかとということです。

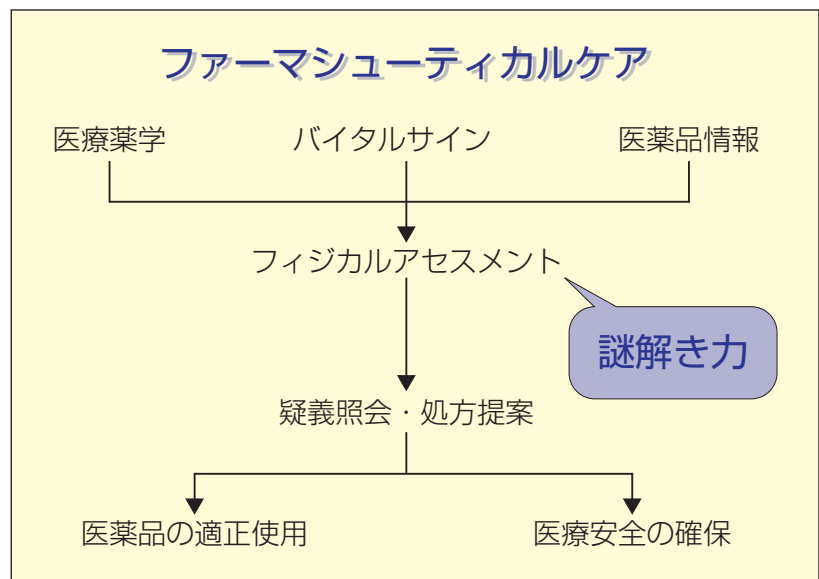
薬剤師の活動や概念が集約される 2つのテーマとは

本連載でも触れてきましたが、薬剤師の仕事は、処方せんの受け取りから始まって薬歴記載で終わるものではないはず。お薬の調製は調剤の重要な一部分ではありますが、機械的作業は機械が行う時代になっています。

やはり、根本にあるのは、何度となく言われてきた、ファーマシューティカルケアやプレアボイドの実践であると思います。なぜなら、この2つをきちんとした専門的教育と理論に基づき実践する医療人は、薬剤師のほかにはいないからです。

ファーマシューティカルケアや効果的な疑義照会や処方提案を実践するには、薬剤師が患者さんの状態を把握しておかなくてはなりませんし、その理論的背景には薬学的専門性が十分に活かされていなくてはなりません。これが、まさに薬剤師が行うフィジカルアセスメントなのですが、これを私は「謎解き力」と呼んでいるわけです。

そして、薬剤師のテーマとしては、やはり「医薬品の適正使用」と「医療安全の確保」であり、いろいろな活動や概念は、ここに集約していくように感じています(図)。



©Kenji Hazama, M. D., Ph. D.